

彼女は語る

沖縄県立首里高等学校三年 天久 聖菜

昭和十九年、夏

沖縄の海が穏やかだった頃
ガジュマルの木に登りながら
九歳の少女は夢見ていた。
群青の空を眺め
何気ない日々の幸せを感じ
黒い髪をなびかせて笑う
そんな未来の自分を。

消したくない、命の炎を。

昭和二十年、春

激しい空襲とともに
海一面の軍艦がおし寄せた
米軍の上陸
戦争が始まりを告げる
それは体を蝕んでいく癌細胞のようなもので
ある。

少女の未来をいとも簡単に踏み潰す。

お前は夢など見るなと言うように
お前が笑うことを許さないと言うように
家族の命を一つ、また一つと奪っていく。
悲しみに暮れる暇もなく、少女は進む、進む。
死の恐怖に怯えながら
心身に消えない傷を負いながら
先の見えぬ道をひたすらに前へ、前へ。
消したくない、命の炎を。

昭和二十年、夏

戦争は形だけの終わりを迎える。
少女の中の闇が晴れることはない。
家族を失った悲しみ
深く心身に残った埋めようのない傷
消えてしまった故郷の景色
嗚呼、戻らないあの日々
幼馴染とよく遊んだ大きなガジュマルの木
夕闇染まる頃、聞こえてきた隣のお爺さんの
三線の音色

ボロボロになった小さな手を重ね少女は祈る。
これから先の未来が平和になるように
もう二度と戦争が起らないように
これ以上、同じ思いをする人がいないように
大粒の涙を流しながら少女は祈るのだ。

消したくない、命の炎を。

昭和三十年、夏

沖縄の地は少しずつ形を取り戻していった。
それでも年頃になった少女はあの日々を忘れない
澄み渡る海を眺めても
群青の空を仰ぎ見ても
綺麗な三線の音を聞いても
あの日々が脳裏をよぎる。
それでも生きていく。
生かされた命を大切にしながら
美味しいものを食べて
綺麗な景色を眺めて
死の恐怖に怯えることなく過ごせる
そんな日々に感謝をしながら
これからの生きていくのだ。

消したくない、命の炎を。

平成から令和へ

年老いた少女は小さなベンチに腰掛けながら
群青の空を仰ぎ見ながら語る。
忘れもしないあの日々を
丁寧に鮮明に語る。
これから先もあの日々を忘れてはいけない
少しでも良いから戦争について知ってほしい
命の重さを戦争の悲惨さを忘れてはいけない
たくさんの思いを込めながら、年老いた少女は語る。

消さない、命の炎を。

私達は忘れてはいけない。
沖縄の地を闇で包んだあの日々を。
たくさんの命を奪ったあの出来事を。
私達は無知でいてはいけない。
命の重さを戦争の悲惨さを知らなくてははいけない。
少しだけ、少しだけで良いから
戦争について知ってほしい。
先人達の声を未来永劫、受け継げるように。
二度とあの日々を繰り返さぬように。